

インフォーマル・ネットワークとwell-being(下)

- 育児におけるネットワークのサポート効果 -

研究開発部 松田 茂樹

目次

1. 問題設定	
2. 先行研究	
3. 理論枠組み	
4. データ	
5. 育児ネットワークのかたち (以上前号)	
6. 育児ネットワークと母親のwell-being	5
7. 育児ネットワークの形成要因	12
8. 結論と考察	15

要旨

育児ネットワークが母親のwell-beingへ与えるサポート効果を分析した結果、父親、親族(特に母親方)、非親族のサポートが、well-beingを向上させる効果があることが明らかになった。非親族ネットワークの構造とサポート効果との関係をみると、「規模」が大きく、混合した「構成」(就労状況)であり、「密度」が低すぎず高すぎないという構造特性で高いサポート効果が発揮されていた。中でも、密度がカーブ効果を発揮する点は新たな発見である。また、こうしたネットワークからのサポート効果は、保育園・幼稚園からの育児サポートの効果と同等かそれ以上の力を発揮していた。

ネットワークの形成要因についてみると、親族ネットワークの規模はそれら親族までの距離によって、非親族ネットワークの規模は母親の就労、社会階層、地域性、平均的属性からの乖離、きっかけ・場の要因によって規定される。このようにネットワークは社会的に規定されるものである。

分析結果から、母親のwell-being向上のためには、父親も育児にかかわり、さまざまな親族・非親族がそれをサポートするかたちが望ましいと考えられる。構造と力の関係を考慮すると、多くの人が育児に直接・間接的にかかわりつつも、過度に同質のネットワークの中で育児を行うのではなく、適度にルースで多様性と自律性のあるネットワークの中で育児を行う環境を構築することが大切である。またネットワークは外部からあてがわれるのではなく、本人が主体的に選択・構築していくことが必要であろう。

本稿の分析は育児ネットワークに関するものだが、ここでの知見は育児以外の領域のインフォーマル・ネットワークを活性化させ、社会的に活用するための示唆を含んでいる。インフォーマル・ネットワークの潜在的なサポート効果は大きい。それを引き出すためには、構造と力、ネットワーク構築の選択性・主体性などが視点となると考えられる。

キーワード：育児ネットワーク、ソーシャル・サポート、well-being

本稿の目的は、個人が取り結んでいる家族、親族、非親族のネットワークが発揮するサポート力を実証的に解明して、福祉の担い手として再評価を促すことである。実証研究で取り上げるのは育児の領域におけるネットワークであり、具体的な分析課題は育児ネットワークの実態、サポート効果、形成要因である。

アンケート調査は、2000年11月に、東京の保育園・幼稚園に通う当該年度に満4～6歳になる子をもつ母親に対して実施した。発送数1,004、有効回収数407(有効回収率40.5%)である(調査の詳細は前号を参照)。

前号では、先行研究をもとに理論枠組みを作成し、育児期の母親に対するアンケート調査から育児ネットワークの実態を分析した。今号では、育児ネットワークがwell-beingへ与えるサポート効果とネットワークの形成要因の分析を行う。分析結果をもとに、育児ネットワークとwell-beingの関係と、インフォーマル・ネットワークの社会的活用に向けたインプリケーションを示したい。

6. 育児ネットワークと母親のwell-being

(1) 母親のwell-beingの測定

本稿で使用しているwell-beingという表現は心理面の安寧を表す上位概念であるため、調査分析を行う際にはwell-beingの具体的な側面を操作化(尺度化)して分析を行う。McLanahan and Adams(1987)を参考にすると、母親のwell-beingには満足度・幸福度(QOL)という心理的にポジティブな面と、うつ症状や不安というネガティブな面がある。またその水準には、育児の領域と生活全体の領域のものがある。これらをふまえて、本稿では図表17に示すように4種類の指標によってwell-beingを測定した。心理的にポジティブな面の指標としては育児満足度と生活満足度を用い、心理的にネガティブな面については育児の領域では育児不安度、生活全体の領域ではディストレスを採用した。

育児満足度：子どもとの生活に対する満足度を「非常に満足」から「非常に不満」までの7件法で尋ね、これに7～1点を与えた。得点分布は1～7点、平均値は5.4点である。

生活満足度：生活全体に対する満足度を「非常に満足」から「非常に不満」までの7件法で尋ね、これに7～1点を与えた。得点分

図表17 well-beingをとらえる4つの指標

	QOL	ディストレス・不安
育児領域	育児満足度	育児不安度
生活全体領域	生活満足度	ディストレス

布は1～7点、平均値は4.9点である。

育児不安度：育児不安尺度の簡易版(牧野・中西,1985)のうち「子どものことで、どうしてもよいかわからなくなることがある」など6項目について、「よくある」(4点)から「まったくない」(1点)までの4段階の回答を合計する尺度を作成した^{*1}。合成変数の得点分布は6～24点、平均値は14.7点、クロンバックの α は0.76である^{*2}。

ディストレス：心理的うつ状態を測定する指標であるCES-Dの9項目^{*3}を用いて、合成尺度を作った。これは過去1週間に「ゆうつだと感じたこと」などの頻度について、「まったくなかった」(1点)から「ほとんど毎日」(4点)までの4段階の回答を合計するものである。合成尺度の得点分布は9～36点、平均値は13.2点、 α は0.89である。

各指標間の相関係数は、育児満足度と生活満足度とは $r=.56$ 、育児不安度とディス

トレスとは $r=.46$ であり正の相関関係となっており、前2者と後2者とは負の相関となっている。それぞれポジティブ/ネガティブという心理的に逆の側面を測定しているといえる。

(2)育児ネットワークとwell-being

育児ネットワークの構造をあらわす各指標(前号参照)と、well-being指標との関連の有無を分析した。具体的な分析方法としては、well-beingの各指標を被説明変数、育児ネットワークにかかわる変数およびコントロール変数を説明変数とした重回帰分析等を行った^{*4}。具体的な分析結果は多岐にわたるため割愛するが、属性要因等をコントロールした上で、育児ネットワークのサポート効果は図表18のとおりであるという結果が得られた。

分析結果からいえることの第一は、育児

図表18 育児ネットワークとwell-beingとの関係

	QOL		ディストレス・不安	
	育児満足度	生活満足度	育児不安度	ディストレス
父親育児サポート	+(都心)	+	-	-
親族ネットワーク・母親方規模	+(都心)	+(都心)		-(都心)
父親方規模				-(都心)
父親方親族同居				+(都心)
非親族ネットワーク・規模	+(郊外)		-	
密度	(郊外)		(郊外)	
構成(就労形態同質)		-(郊外)		+(郊外)
保育園・幼稚園からのサポート	+(郊外)	+(郊外)	-(郊外)	-(郊外)

注：+、-、
空欄は統計的関連がみられなかった個所である。

ネットワークのサポート効果の発現は、居住地によって異なるということである。父親の育児サポートは都心部(23区内)と郊外部(多摩周辺地区)のほぼ双方で母親のwell-beingを向上させる効果があるのに対して、親族ネットワークは都心部で、非親族ネットワークは郊外部の居住者でサポート効果を発揮する傾向が強い。言い換えれば都心部の母親たちは主に父親と親族のサポートに支えられているのに対して、郊外部の母親たちは父親と非親族に支えられているとみることができる。

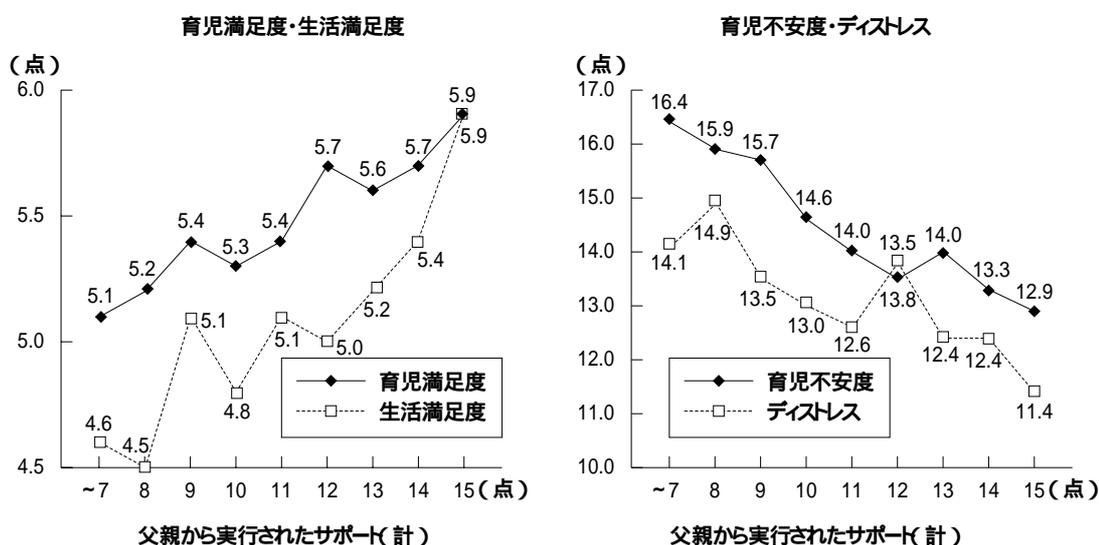
各項目の具体的な関係は次のとおりである。父親の育児サポート(前号参照)が高いほど育児満足度・生活満足度が高まり、育児不安度とディストレスが低くなる(図表19)。

親族ネットワークのサポート効果は、都心部居住者において、かつ母親方親族ネットワークで強くみられる。都心部では母親方親族ネットワークの規模が大きくなるほど育児満足度が高まり、育児不安度が低下する

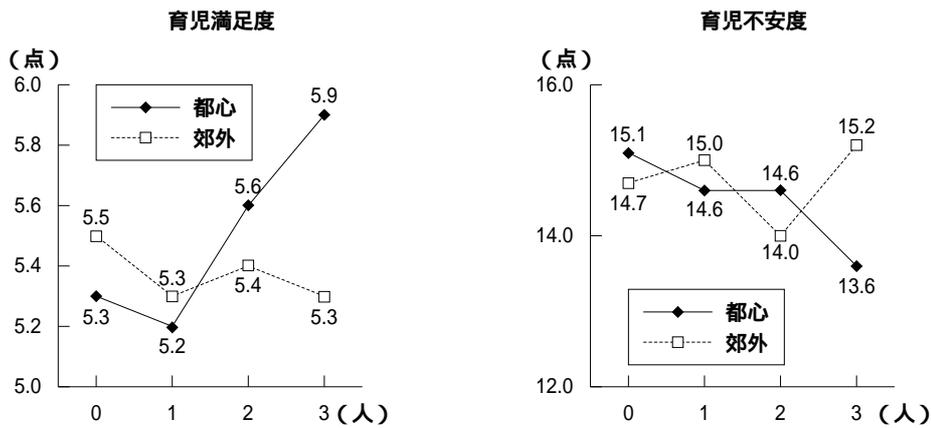
が、郊外部ではそのような関係はみられない(図表20)。また図表は割愛するが、都心部では父親方親族の規模が大きいほどディストレスが低下する。ただし、父親方親族が同居していると、ディストレスは高くなっていった。

非親族ネットワークのサポート効果についてみると、規模が大きくなるほど、郊外部では育児満足度が高くなり、都心部と郊外部ともに育児不安度が低くなる(図表21)。構成についてみると、知り合いの種類やネットワーク・メンバーの子どもの有無によってwell-beingは変わらないが、就労形態とwell-beingとは関連している。郊外部では、就労形態の構成が混合していると(就労者と無職者の両方が混ざっているネットワークであると)生活満足度が高く、ディストレスが低くなる傾向がある(図表22)。またネットワークの密度の影響は郊外部でのみみられ、低密度(0.33以下)と高密度(0.83以上)で育児満足度が低く、中密度(0.5~0.67)で高くなっている(図表23)。育児不安度に

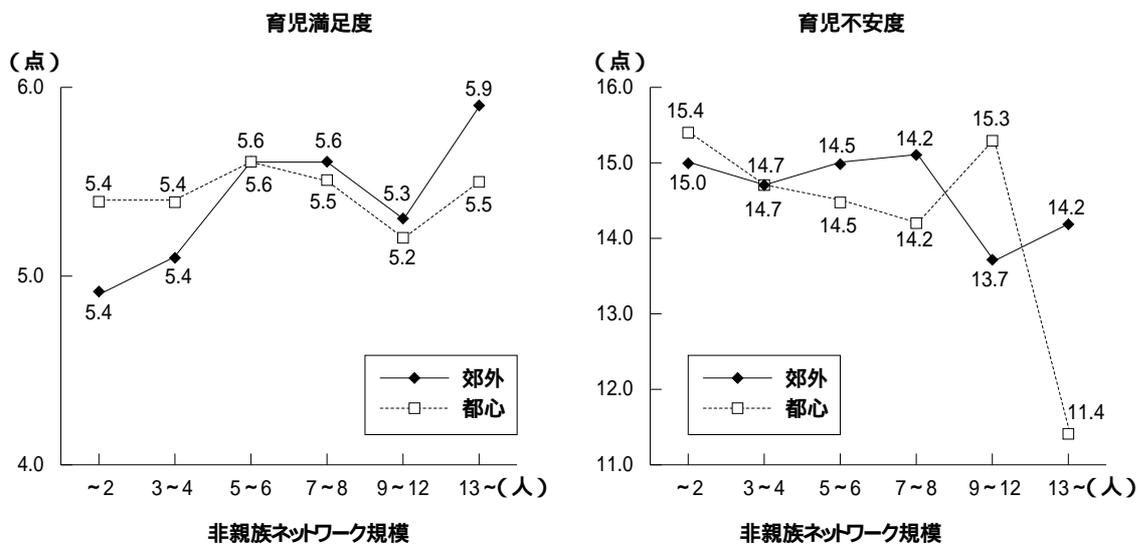
図表19 父親から実行されたサポートとwell-being



図表20 母親方親族ネットワークの規模とwell-being



図表21 非親族ネットワークの規模とwell-being



図表22 非親族ネットワークの構成(就労形態)とwell-being

	生活満足度 (23区)	生活満足度 (郊外)	ディストレス (23区)	ディストレス (郊外)
就労者+無職者	4.8	5.3	13.2	12.0
無職者のみ	4.8	4.8	12.6	14.2
就労者のみ	5.1	4.9	13.1	13.1

注:非親族ネットワークの規模が3人以上の者が対象。
網掛け部分が統計的に有意な差がある箇所。

については、そのほぼ逆の傾向がみられる。密度がwell-beingにカーブ効果を与えることは拙稿(松田,2000)で発見されたものであるが、調査対象を変えても、このカーブ効果は確認された。

最後に保育園・幼稚園から実行された情報・情緒・評価面の育児サポート^{*5}についてみると、郊外部において、サポートが高いほど母親のwell-beingが改善する傾向がみられる(図表24)。人的ネットワークのサポートのみならず、こうした専門的な託児機関からの育児サポートがあることによって母親のwell-beingは改善される。

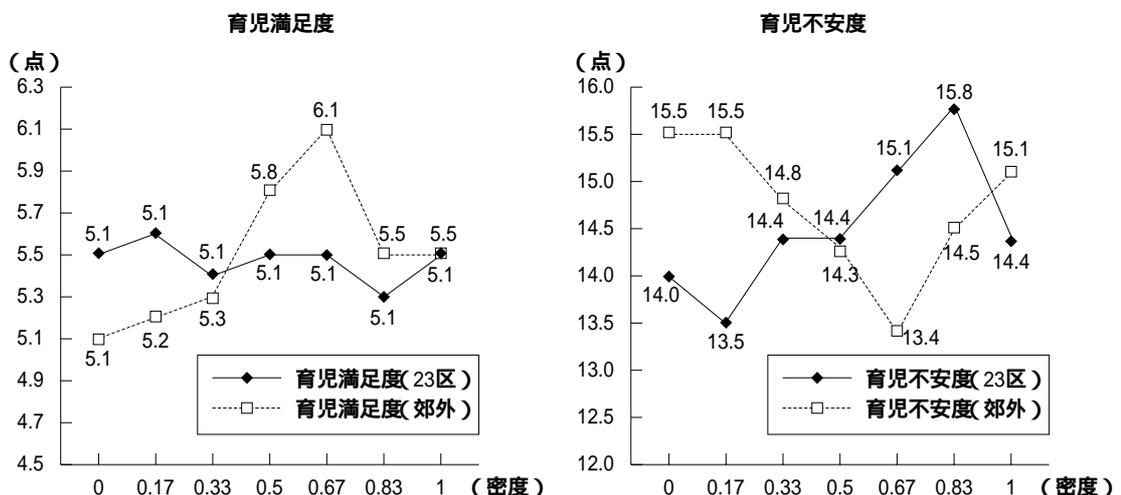
(3) 育児ネットワークと保育サービスのサポート

育児ネットワークや保育園・幼稚園からのサポートには、well-beingを改善する効果がある。それでは父親、親族、非親族のサポート効果は、保育園・幼稚園といった専門機関のそれと比較した場合、高いのであろうかそれとも低いのであろうか。

父親、母親方親族(都心部)、非親族(郊外部)、保育園・幼稚園(郊外部)の各サポート効果の程度を示したものが図表25である。ここでは他の変数の影響をコントロールした上で、ここにあげた変数の値が調査した最小値から最大値まで変化したときに、育児満足度などの指標が何割改善するかをみている(ただし、密度については密度「低」と「中」、構成については「無職者だけ」と「就労者+無職者」のグループ間比較である^{*6}。表中の空欄は、統計的に有意な影響がみられなかった個所である。例えば、育児満足度についてみると、父親の育児サポートが最も発揮されると満足度は15%高くなる。その他影響が大きいところをみると、郊外部では、非親族ネットワーク規模が大きくなると最大10%、密度が低い者よりも中程度の者で最大12%高くなる。また保育園・幼稚園からの育児サポートは、最大10%改善させる効果を発揮する。

これらの結果から、第一に、父親からのサポートが広範なwell-being指標を改善さ

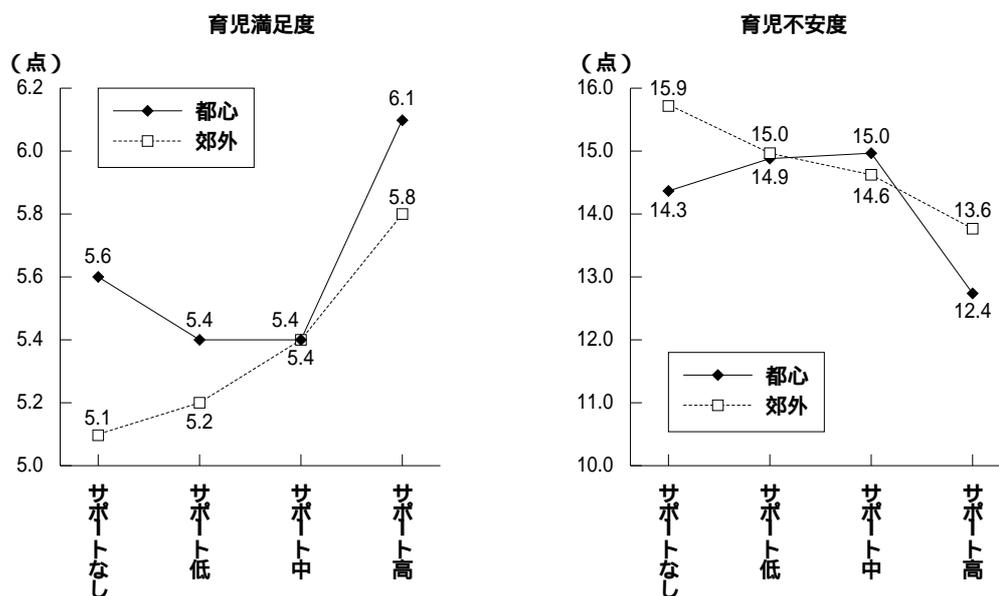
図表23 非親族ネットワークの密度とwell-being



せ、かつ効果が最も大きいことが指摘できる。母親のwell-being向上のためには父親の育児参加の促進が第一に必要であろう。第二には、保育園・幼稚園といった専門機関からのサポート効果とインフォーマルな

サポートの効果を比較すると、後者は前者に勝るとも劣らない力を発揮していることがあげられる。母親のwell-beingを向上させるためには、保育園・幼稚園といった専門機関がサポートするだけでなく、社会

図表24 保育園・幼稚園からのサポートとwell-being



図表25 育児ネットワークのサポートによるwell-being指標の改善効果

(単位:%)

	育児満足度	生活満足度	育児不安度	ディストレス
父親育児サポート(全体)サポート最低 最高	+15	+33	-23	-12
母親方親族規模(23区)0人 3人	+3	+7	-1	-7
非親族規模(郊外)0人 16人	+10		-9	
構成(郊外)無職者だけ 就労・無職混合		+8		-11
密度(郊外)密度低 中	+12		-9	
保育・育児サポート(郊外)サポート最低 最高	+10	+15	-8	-10

注:数値は、ネットワークの構造やサポート度が変化したときに、各well-being指標が改善される割合である。
各値は、各種属性要因をコントロールしたときのものである。
空欄は統計的に有意な関係がみられない箇所。

的にみれば潜在的な資源であるインフォーマル・ネットワークをいかに築くかという点も極めて重要になるとみられる。なお、こうしたネットワークのサポート以外に、所得水準や学歴といった属性要因もwell-beingの水準を規定している。本稿では詳細な結果は割愛したが、育児ネットワークのサポート力はこうした属性要因の効果よりも強くなっていた^{*7}。

(4) 緩衝効果

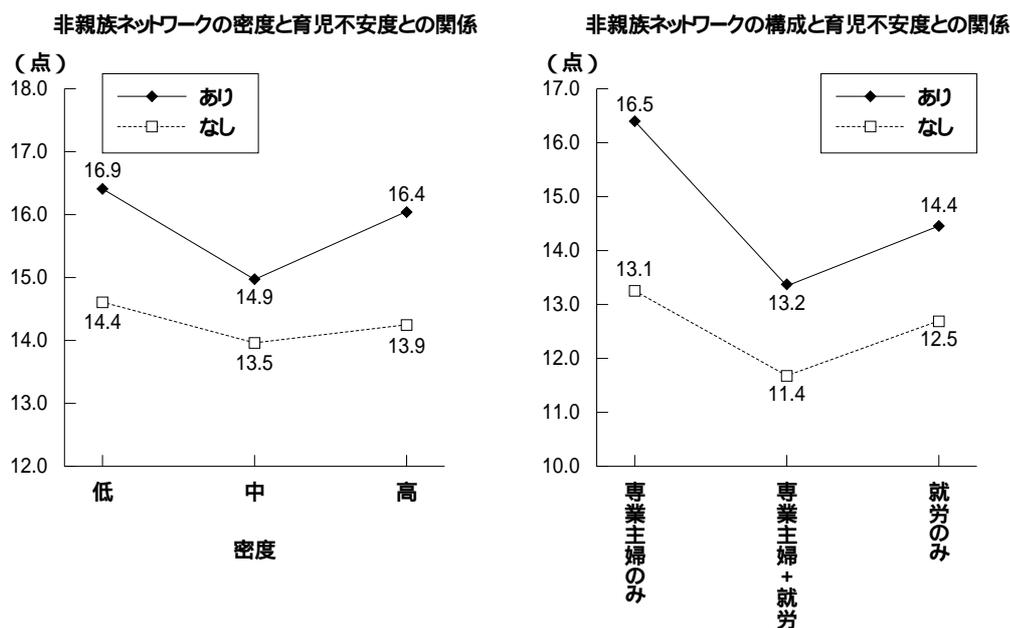
続いて、育児ネットワークの緩衝効果について示したい。本稿でいう緩衝効果とは、子どもが反抗期や病気がちといった<育児のリスクファクター>がない状況よりも、ある状況の方で育児ネットワークのサポート効果が強く発揮されるというものである^{*8}。

分析の結果、限定的ではあるが、郊外部

居住者において非親族ネットワークの密度と構成でそのような効果を見いだすことができた(図表26)。まず密度の効果についてみると、それらリスクファクターがない人よりもある人で、育児不安度に対する密度のカーブの谷が深くなっている。すなわち密度のサポート効果は、リスクファクターがある状況でより強く発揮されている。また構成についてみると、リスクファクターがある人の方が、構成の違いによるディストレスの差が若干大きくなっていた^{*9}。

結果は限定的なものであるが、育児ネットワークのサポートは、育児において何らかの困難な状況に置かれている者で特に必要なものであると推察される。

図表26 育児のリスクファクターの有無によるサポート効果のちがい



注: 郊外部居住者で、非親族ネットワークの規模が3人以上の者が対象。
密度の区分は次のとおりである。低=0.33以下、中=0.5~0.67、高=0.87以上。

7. 育児ネットワークの形成要因

(1) 親族ネットワーク

続いて親族と非親族ネットワークの形成要因について分析した結果を示す。まず母親方／父親方親族ネットワークの規模を決定する要因を分析した結果が図表27である。ここでは核家族世帯を対象に、規模を

被説明変数とし、パーソナル要因と環境要因、父親の育児サポートといった育児ネットワークの他の側面を説明変数とした重回帰分析を実施した^{*10}。

分析結果から明らかになった点は次の3点である。第一に、父親の年収レベルによって親族ネットワーク規模が異なることがあげられる。年収が高いほど、母親方／父親方双方の規模が小さくなる。父親の年収は

図表27 親族ネットワークの規模を決める要因(核家族世帯が対象)

説明変数	母親方親族		父親方親族	
	モデル1	モデル2	モデル1	モデル2
パーソナル要因				
末子年齢	-.018	-.025	-.001	-.024
子ども数	.018	-.011	-.111	-.068
母親短大卒以上ダミー	-.091	-.103	.118	-.019
父親年収	-.054#		-.074**	
環境要因				
保育園ダミー	.458**	.259#	-.084	-.074
23区居住ダミー	.173	-.031	.073	-.022
ネットワーク構造				
父親育児サポート		.039*		.023
親族ネットワーク・父方親族 / 母方規模		.052		.020
親族徒歩圏ダミー(母親方 / 父親方)		1.160**		1.043**
F	2.48*	10.18**	1.70	6.89**
Adj-R2	.027	.185	.013	.127
有効ケース数	322			

注:重回帰分析の結果。表中の数値は偏回帰係数である。

親族徒歩圏ダミーは、母親方親族ネットワークの分析のときは母親方祖母について、父親方親族ネットワークの分析のときは父親方祖母についてのものである。

+10%水準、*5%水準、**1%水準で有意。

社会階層をあらわす変数のひとつであるが、この結果は社会階層が高いほど親族に頼ることが少ないことを示していると考えられる。

第二には、保育園利用者で母親方親族のネットワーク規模が大きいことである。保育園利用者は就労している者であるため、就労中の育児サポートが必要となるためであろう。

第三には、父親の育児サポートが多いほどネットワーク規模が大きくなっている。これは父親の育児サポートが求められる状況では、母親方親族からのサポートも同時に求められるという関係をあらわしていると推察されるため、父親の育児サポートが多いことが直接親族ネットワークを大きくしているという関係ではないと思われる。社会的ネットワーク研究の主要なテーマのひとつに「ネットワークは代替的か、それとも補完的か」という問いがあるが、この結果からは父親の育児サポートと親族ネットワークとの関係は代替的なものではないとみられる。

最後に、親族の居住地の影響があげられる。親族(ここでは祖母)が徒歩圏に居住していると育児ネットワークとなるが多くなっている。前記の要因のうちで、この「親族までの距離」要因の影響が規模を最も規定するものである。

以上のことから、親族ネットワークを形成する要因は、父親の収入水準(社会階層を代理しているとみられる)、保育園の利用(母親が就労していること)、親族までの距離であると考えられる。中でも、親族までの距離が、親族ネットワーク形成の最重要要因である。

(2)非親族ネットワーク

非親族ネットワークの規模の重回帰分析結果が図表28である。ここでは投入する説明変数間の相関関係を考慮して、投入する変数を変えたモデル1~3の分析を実施している。分析結果を集約すると、非親族ネットワークの規模は、母親の就労、社会階層、地域性、平均的属性からの乖離、きっかけ・場、の5つのファクターによって決定されている。

まず母親が無職(専業主婦)に比べて、就労している者では、規模が小さくなる。

次に社会階層にかかわる指標についてみると、父親の年収水準が高くなるほど(レベル1 レベル4)規模が大きくなる^{*11}。また母親の学歴が高いと、規模が大きくなる傾向がある。すなわち社会階層が高いほど、非親族ネットワークを拡充することができている。

地域性についてみると、都心部よりも郊外部の方が、ネットワーク規模が大きい。

平均的属性からの乖離とは、回答者本人の属性が、育児期の母親の<平均像>から外れていることである。母親本人の年齢が30歳代後半以上である、父親の年収水準が特に高い(レベル5)、持ち家に住んでいると、ネットワーク規模は小さい。非親族ネットワークの大半は子どもを通じて知り合った子育て仲間のネットワークである。彼らは自分と属性の近い者同士が結びついている。人々は自分と似た者とのネットワークを発達させる傾向が強いからである(Fischer, 1982; Marsden, 1987ほか)。そのため属性的に<平均像>から外れた者は、ネットワークを築きにくくなってしまわないかと推察される。

図表28 非親族ネットワークの規模を決める要因

説明変数	非親族ネットワーク・規模		
	モデル1	モデル2	モデル3
パーソナル要因			
末子年齢	.083	.074	.045
子ども数	.244	.326	.260
母親年齢・20歳代後半ダミー	.248	.054	-.134
30歳代前半(RG)			
30歳代後半以上ダミー	-.989*	-1.059*	-.968*
母親短大卒以上ダミー	.882#	.767	.727
母親就労・フルタイムダミー	-1.739*		
パートダミー	-1.194#		
自営業ダミー	.569		
無職(RG)			
父親年収・レベル1(RG)			
レベル2	.713	.568	.680
レベル3	1.289#	1.140	1.178
レベル4	2.126*	1.989*	2.269**
レベル5	.275	.340	.757
環境要因			
23区居住ダミー	-.472		
育児サークル参加経験ありダミー	1.461**	1.260**	1.212**
住居形態・持ち家ダミー	-1.132*	-1.253**	-1.320**
社宅ダミー	-1.429#	-1.567#	-1.332
賃貸住宅(RG)			
保育園ダミー		-1.095*	-1.213*
幼稚園23区(RG)			
幼稚園郊外部ダミー		1.210*	1.410**
ネットワーク構造			
父親育児サポート			-.011
親族ネットワーク・母親方規模			.656**
父親方規模			.209
三世代世帯ダミー			.262
F	3.91**	4.80**	4.69**
Adj-R2	.107	.121	.146
有効ケース数		387	

注:重回帰分析の結果。表中の数値は偏回帰係数である。
 父親の年収水準は、分布を5区分したものである。
 +10%水準、*5%水準、**1%水準で有意。

きっかけ・場についてみると、育児サークルへの参加経験がある者では規模が大きい。きっかけや場があれば、豊かなネットワークを形成することが可能となると考えられる。

その他、育児ネットワークの影響についてみると、まず父親の育児サポートは規模に影響を与えていない。また母親方親族ネットワークの規模が大きくなるほど、非親族ネットワーク規模が大きくなる傾向がみられるが、父親方親族、世帯構成については有意な影響はみられなかった。父親の育児サポートが多ければ、あるいは親族ネットワークがしっかりしていれば、非親族ネットワーク規模が減るものではないと考えられる。父親の育児サポート、親族ネットワーク、非親族ネットワークは、別々に求められるものであろう。

8. 結論と考察

(1) サポート資源としての育児ネットワーク

本研究における具体的な分析課題は冒頭の問題設定で示した ~ の問い(目的と章構成を参照)であるが、以下ではそれらに答えるかたちで考察を行っていきたい。

育児ネットワークにはwell-beingを維持・向上させる効果があるのか?() 本稿の分析結果からは、まず育児ネットワークのサポート効果はあるといえる。そしてそのサポート効果は、QOLとディストレス・不安という母親のwell-beingの両面に対して、かつ育児関連の領域と生活全体の領域の両

水準にまで及ぶ広範なものである。

また、どのような構造でサポート効果が最も発揮されるのか()という点であるが、非親族ネットワークについてみると規模が大きいほど、構成(就労状況)が混合しているほど、密度が中程度であると、サポート効果が高いことが明らかになった。これらの構造でサポート力が高い理由については、次節で考察を加えたい。

次に問題になるのが、育児ネットワークのサポート効果はどの程度の力があるのか()という点である。保育園・幼稚園を利用している母親たちのwell-beingを向上させる効果を、育児ネットワークのサポートと保育園・幼稚園のそれについて比較検討した結果、父親、母親方親族、非親族のサポート効果は、保育園・幼稚園という専門機関から実行されたサポートの効果と比較して、同等かそれ以上の力を発揮している可能性が高いと推察された。中でも効果が大きいのが父親のサポートであり、次に非親族ネットワークの構造の効果である。非親族ネットワークの構造の効果は、規模、密度、構成という異なる次元の効果が組み合わさった場合にさらに発揮される。本稿の冒頭でインフォーマル・ネットワークのことを<潜在的資源>と呼んだが、その潜在的な力は大方の人が予想している以上に大きいと言えるのではないだろうか。ただし、サポート効果の大きさは測定方法に依存するため、これはあくまでも本稿における測定方法でみた場合という限定付きのものである。

最後に のネットワークの形成要因であるが、親族ネットワークの規模は、近接性、社会階層(父親の収入水準)、母親の就労

が、非親族ネットワークの規模は、母親の就労、社会階層、地域性、平均的属性からの乖離、きっかけ・場の5つのファクターが規定していた。ネットワークは、属性や環境要因により社会的に決定される。

(2)構造と力

ネットワークがどのような構造であればサポートを多く発揮するのかという問題は、社会的ネットワーク研究において最も解明が待たれる研究課題のひとつである(Wellman and Gulia, 1999)。本稿の結果からネットワーク構造に注目すると、「規模」が大きい、就労状況の「構成」が混合している、また低すぎず高すぎない「密度」という構造特性において、高いサポート効果が発揮されていることが明らかになった。以下では、こうした構造特性をもつネットワークで、サポート効果が高い理由を考察したい。その際に手がかりになるのが、ネットワークがもつ「資源」と「拘束」という両面(野沢, 1999)が、どのような構造特性で発揮されるかという視点である。

まず規模が大きいほどサポート力が高くなるのは、サポートの「多様性」が増加するためと考えられる。ここで発揮されるのは、ネットワークがもつ「資源」面の力である(図表29)。規模が大きくなると、すなわち、ネットワークの規模が大きくなればなるほどwell-beingが高くなるのは、サポート提供者が多様になるためにサポートの種類が増大し、かつサポートを受ける機会も増大するためであると考えられる。言い換えれば、サポート内容の「空白」とサポートの機会の「空白」が生じることがなくなるためとみられる。

また就労状況の「構成」が混合したネットワークでサポート効果が高い理由も、同様に「多様性」というコンセプトで説明できるとみられる。ネットワーク内に多様な人間がいる方が手段、情報、情緒、評価といった各面について多様なサポートを受けることができるようになるため、就労者だけあるいは非就労者だけといった均質なネットワークを保有する者よりも、well-beingが高くなるのではないだろうか。ただし、就労状況以外の構成にかかわる変数についてはwell-beingとの間に明確な関係はみられなかった。この点はそれらの指標自体の均質性と関係しているのではないかと思われる。就労形態と比較して、知り合ったきっかけ、性別、子どもの年齢(同じ年くらい/年長の子あり/年少の子あり)という指標ははるかに均質である。過度な均質状態の中での差異は、回答者本人には「混合」と呼べるほど多様性をもつネットワークとして認識されていないのではなかろうか。

そして分析でのハイライトが「密度」のカーブ効果である。これは、「密度が高いほどサポート効果を発揮する」という資源としての力と「密度が高すぎるとかえってサポートにマイナスに働く」という拘束としての力が組み合わさって析出されたものであると推察される(図表29)。まず「資源」としての力は、Wellmanが指摘する「コミュニケーションの円滑化」に伴うサポート力の向上によると推察される。密度が高くなるに従いメンバー間に関係が生じてニーズを把握するためのコミュニケーションが活発化するため、適切な種類のソーシャル・サポートを動員することが可能になる(Wellman and Gulia 1999)。一方、「制約」の力は、ネット

ワークの「自律性 / 拘束性」の点から解釈することができる。密度が過度に高いネットワークは構造的に「集団」に近く、仲間意識やしがらみから「拘束性」が高くなるために、サポートを受ける者の「自律性」を低下させる。このため過度に高密度のネットワークでは、かえってwell-beingが低下すると考えられる。

(3) サポート効果の地域差

次に、育児ネットワークのサポート効果に地域差が生じる理由を考察したい。父親のサポートは都心部と郊外部の双方でみられるため、親族ネットワーク(都心部)と非親族ネットワーク(郊外部)のサポート効果の地域差が問題となる。本データから考えられる理由は、ネットワークの活用度の差である。

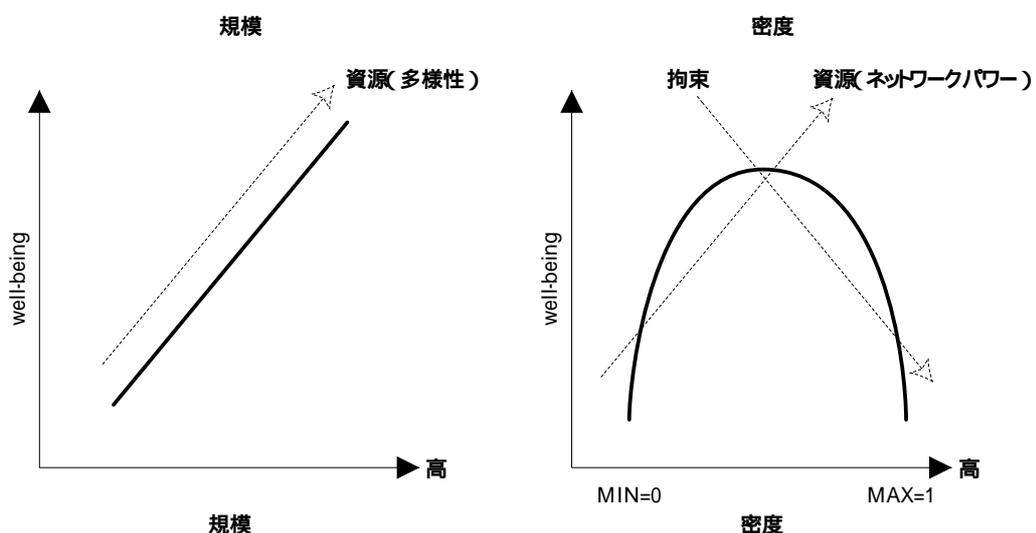
都心部と郊外部を比較すると、母親方親族ネットワークの規模は同程度だが、交流頻度は都心部の方が郊外部よりも多い。都心部での交流頻度は祖母が週あたり2.2回、

祖父が2.0回、きょうだい1.4回であるが、郊外部ではそれぞれ1.8回、1.5回、1.2回である。この差は親族の近接性によって生じるとみられ、徒歩圏(歩いて15-30分未満圏)に祖父母がいる割合は郊外部で16%に対して都心部では28%にのぼる。すなわち都市部の方が近くに祖父母が居住しているため、高い頻度でサポートを受けることができる。こうしたネットワーク活用度の差が、都心部の方が困ったときには親族に頼りやすく、郊外部では頼りにくくしているとみられる。都心部の方が、母親方親族のサポート効果が大きいのはこのためであろう。

一方、郊外部では親族に頼りにくいために、彼らは非親族ネットワークを発達させて、そこからサポートを得ていると考えられる。郊外部の方が都心部よりも非親族ネットワークが多いことがそれを表している。

以上のようなネットワーク活用度の差によって、都心部では母親方親族のサポート効果が強く発揮され、郊外部では非親族のサポート効果が強く発揮されていると推察さ

図表29 ネットワークの構造と力の関係



れる。ただし都心部においても非親族ネットワークの規模が大きくなるほど母親の育児不安が低下する関係がみられることを考慮すると、ここではあくまでも両地域の傾向を指摘したものであり、都心部において非親族ネットワークが全く必要ないということではない。

こうした居住地域による親族と非親族ネットワークの活用度の差は、先行研究でもみられる点である。都心部の保育園を利用している母親を対象に、育児ネットワークの実態を研究した久保(2001)では、手段的な育児支援は親族、特に母親方親族が中心的に実施しているという結果が得られている。また松本(1994)では、首都圏では都心部よりも都市郊外の方が親族との接触頻度が低くなることが指摘されている。

(4) ネットワークをいかに築くか

母親のwell-being向上のためには、父親の育児サポートを促進し、親族と非親族のネットワークを拡大することが求められる。以下ではそのための方策について考察したい。ただし父親の育児サポートの程度を決める要因については、残念ながらデータの制約で本稿では分析できないため、このテーマについては拙稿(松田, 近刊)に譲りたい。

まず親族ネットワークであるが、分析結果からはこれを今以上に拡充するのは難しいことが窺える。親族ネットワークの規模はそれら親族までの距離によって左右される。居住地が近ければ親族からサポートを受けられ、遠ければできない。この要因の影響が圧倒的に大きい。育児のために親族の近くに住むというのは不可能な選択肢

ではないが、仕事や経済的な制約から多くの者がそうした方策をとれないのが現実ではないだろうか。

そして問題になるのが非親族ネットワークである。その規模を決める要因は、母親の就労、社会階層、地域性、平均的属性からの乖離、きっかけ・場である。この結果をみると、非親族ネットワークを拡大するための方策としては、きっかけ・場へのアクセスとその提供が適当であろう。育児サークルはその一例であり、ほかにも児童館や母親教室など多様な場が考えられる。無論、人の嗜好は多様であるため、特定の育児サークル、あるいはそうした活動全般への参加を望まない者たちもいることは確かである。したがって、きっかけ・場の提供は、1種類の固定的な場へ皆を集めるのではなく、多くの社会的な選択肢を用意して、そこでのネットワーク構築は自らの手で行うことが大切であろう。

ただし、きっかけ・場を与えれば、皆が強力な非親族ネットワークを築くことができるわけではない。特に、平均的属性から乖離した者にとっては難しい。人と接するきっかけ・場があっても「似た者」がいなければ、やはりネットワークを築くことはできないからである。育児ネットワークによって自助、共助をしにくい層については、各種保育サービスのサポートやその他専門機関のサポートが特に求められると思われる。

(5) 育児ネットワークの再編成：多様性と自律性をそなえたネットワーク

先行研究では、母親のwell-beingを向上させるためには、父親の育児参加に加えて、世帯外の親族、近隣、友人などの育児への

かかわりを高めること、すなわち育児ネットワーク全体の再編成を行うことが必要であると指摘されている。

本研究結果をふまえると、育児ネットワーク再編成の方向は次のようになると考えられる。すなわち母親のみならず父親も育児にかかわり、さまざまな親族・非親族のメンバーがそれをサポートするというかたちである。その際に問題となるのが構造である。規模が大きく、かつ構成が多様であり、かつ低すぎず高すぎない密度の構造をつくるのが大切である。多くの人々が育児に直接・間接的にかかわりつつも、過度に同質のネットワークの中で育児を行うのではなく、適度にルースで多様性と自律性のあるネットワークの中で育児を行う環境を構築するということである。そのためには、ネットワークは外部からあてがわれるのではなく、本人がネットワークを主体的に選択し、構築していくことが必要である。

ただし、本稿は家族、親族、非親族のサポート力を過信するものではない。母親のwell-beingの向上という課題に限っても、家族、親族、非親族のサポートがあればすべての問題が解決するわけではなく、保育園、幼稚園、その他の保育サービスのサポートも必要である。専門的な知識や情報はそれらの諸機関から提供されることが求められるであろうし、ネットワークの脆弱な者(社会環境・家庭環境から、育児ネットワークに頼ることができない者)に対してはそれら諸機関からのサポートが特に求められるであろう。育児ネットワークを拡充し、保育サービスなどの専門機関がフォローをする両面が必要である。

(6) インフォーマル・ネットワークの社会的活用に向けての視点

インフォーマル・ネットワークは自助と共助のシステムであり、自分(たち)で問題・課題を解決していく力を持つ。現代社会において人々はさまざまな層から成る専門的なインフォーマル・ネットワークを保持しており、各層のネットワークがそれぞれサポート効果を発揮している(育児、教育、介護・看護、仕事、趣味・交友、その他生活上の諸課題、等々)。各層のネットワークの潜在的な力を十分引き出せれば、個人のwell-beingを、ひいては社会全体のwell-beingを高めることができると考えられる。個人にとってみれば、そうしたネットワークをいかに築くかで自身のwell-beingを高めることができる。社会にとってみれば、個人が主体的にネットワークを構築することを支えることで、社会全体のwell-beingの向上や諸問題の解決を達成することができると期待される。

本稿の分析はその中の育児ネットワークに関するものだが、ここでの知見は他層のネットワークを活性化させ、社会的に活用していくことに対する示唆を含んでいる。

第一に、インフォーマル・ネットワーク活用のかぎは「構造」にあるとみられる。育児ネットワークと同じことが他のネットワークについてもあてはまるかどうかは個別に検討が必要であるが、「種類」「規模」「構成」「密度」といった要素と、「多様性」「自律性」といったキーワードは、このネットワークを活性化させる条件を探る際のかぎとなるとみられる。

第二には、ネットワークを拡充するための方策である。非親族ネットワークに関してい

うと、社会的にきっかけ・場を設定して、実際のネットワーク形成は個々人の主体性に任せることが現実的かつ効果的な方法である。また育児ネットワークの分析結果が示唆するのは、密度が過度に高い構造、すなわち集団(に近い構造)ではwell-beingはかえって低下することである。インフォーマル・ネットワークはいわゆる地域共同体的な集団ではなく、文字どおりの<ネットワーク>(網の目: web)であることが求められよう。したがって、ネットワーク拡充のための社会的支援を行う場合には、育児に関する<地域互助組織>をつくるといったように直接ネットワーク拡充にかかわるのではなく、さまざまなきっかけ・場の設定や社会環境整備といった間接的な支援策に徹することが適当であると思われる。

第三には、他のシステムとの組み合わせである。現代社会においてはインフォーマル・ネットワークだけで個人のwell-beingの

向上や生活上の問題解決を行うことは困難である。インフォーマル・ネットワークのほか、NGO・NPO、さらには公的サービス、営利企業という各プレーヤーを社会的に混合して、個人や社会の諸課題に対処していくことが求められる。個人の側からみた場合に、対処策の選択肢が多数用意されている状態をつくることにつながる。インフォーマル・ネットワークは、その際の選択肢のひとつである。

以上が本稿から導出されるインプリケーションである。本稿が明らかにしたものはインフォーマル・ネットワークのサポート効果の氷山の一角にすぎず、未解明の部分は多く残されている。多面的な研究がすすめられてネットワークの全体像が浮き彫りになれば、さらに多くの活用策、さらには現代社会の生活像と人間像がみえてくるのではないだろうか。

(研究開発部 副主任研究員)

【謝辞】

調査にあたっては、東京都内の保育園、幼稚園の諸先生方に協力していただいた。特にせいがの森保育園(東京都八王子市)の藤森平司園長と倉掛秀人副園長からは、調査において多大な支援を受けている。また調査結果の解釈に関して、明治学院大学の野沢慎司教授から有益な助言をいただいた。この場を借りて、感謝の意を表したい。

【注釈】

- *1 「子どものことがわずらわしくてイライラする」「子どものことで、どうしたらよいかわからなくなることがある」「自分は子どもをうまく育てていると思う」「自分1人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう」「毎日毎日同じことの繰り返ししかしていないと思う」「子どもを育てるために、がまんばかりしていると思う」の6項目である。牧野・中西の尺度は合計10項目の質問から合成するものであるが、ここにあげていない4項目は上記項目とは異なる回答傾向を示すため除外している。
- *2 クロンバックの α は尺度の内的一貫性を図る指標である。通常0.7以上であると一貫性が確保されているとされる。
- *3 具体的項目は次のとおりである。「ふだんは何でもないことをわずらわしいと感じたこと」「食欲が落ちたこと」「何をするのも面倒と感じたこと」「物事に集中できなかったこと」「ふだんより口数が少なくなったこと」「家族や友達からはげましてもらっても気分が晴れないこと」「ゆううつだと感じたこと」「悲しいと感じたこと」「何かおそろしい気持ちがあったこと」。
- *4 被説明変数はwell-beingの各指標であり、説明変数は次のとおりである：父親育児サポート、母親方/父親方それぞれの親族ネットワークの規模、非親族ネットワークの規模、構成（就労形態）、密度、保育園利用の有無、保育園・幼稚園からの育児サポート、末子年齢、母親学歴、父親年収。分析手法は、ディストレスはtobit分析、他は重回帰分析を適用した。
- *5 人的ネットワークからの育児サポートは、手段（2種類）、情報、情緒、評価の5種類のサポートで尋ねている。しかし保育園・幼稚園は、それらを利用していること自体が手段的サポートを受けていることになるため、調査では手段以外の面の育児サポートを、父親と同じ項目について測定した。具体的には、情報、情緒、評価面のサポートの有無を尋ねており、それを合計している：サポートなし（0点）、低（1点）、中（2点）、高（3点）。
- *6 具体的な手順は次のとおりである。まず注8に示した分析を行い、属性変数や他の説明変数の影響をコントロールした上で、育児ネットワークにかかわる各変数各自がwell-beingに与える影響（偏回帰係数）を求める。次にその結果をもとに、各変数が最小値から最大値まで変化したときのwell-being指標の改善幅を推計した。
- *7 例えば、生活満足度についてみると、父親の年収水準が500万円上昇した場合の満足度の上昇幅を推計すると4%程度にしかない。
- *8 具体的な項目は次のとおりである。「病気がちである」「反抗期である」「いうことを聞かない」「すぐにぐずる」「双子である」「未熟児である」。
- *9 ここでいうリスクファクターがある人とならない人を合わせて分析した場合、非親族ネットワークの就労構成と育児不安度との間には有意な関係はみられない。

- *10 三世代世帯については、同居親族が即育児ネットワークとなるため、それ以外の要因がここでいう規模を規定することはほとんどない。このため、ここでは核家族世帯にしばって分析を行っている。
- *11 父親の年収の分布を5区分して、下からレベル1、2...、5としている。

【参考文献】

- ・稲葉昭英「ソーシャル・サポートの理論モデル」松井豊・浦光博編『人を支える心の科学』誠心書房：151-175、1998
- ・ - 「なぜ常雇女性のストレインが高くないのか？」石原邦雄編『妻たちの生活ストレスとサポート関係 - 家族・職業・ネットワーク』東京都立大学都市研究所：53-85、1999a
- ・ - 「有配偶女性のディストレスの構造」石原邦雄編『妻たちの生活ストレスとサポート関係 - 家族・職業・ネットワーク』東京都立大学都市研究所：87-119、1999b
- ・稲葉昭英・浦光博・南隆男「ソーシャル・サポート研究の現状と課題」『哲学』85：109-149、1987
- ・落合恵美子『近代家族とフェミニズム』勁草書房、1989
- ・ - 「家族の社会的ネットワークと人口学的世代」蓮見音彦・奥田道大編『21世紀のネオ・コミュニティ』東京大学出版会、101-130、1993
- ・ - 『21世紀家族へ 新版』有斐閣選書、[1994]1997
- ・加藤邦子・石井クンツ昌子・牧野カツコ・土谷みち子「父親の育児参加を規定する要因 - どのような条件が父親の育児参加を進めるのか」『家庭教育研究所紀要』20：38-47、1998
- ・久保圭子「働く母親の個人ネットワークからの子育て支援」『日本家政学誌』52：135-145、2001
- ・厚生省『厚生白書』ぎょうせい、1998
- ・厚生省人口問題研究所『現代日本の家族に関する意識と実態 - 第1回全国家庭動向調査(1993年)』厚生統計協会、1996
- ・人口問題審議会『人口減少社会、未来への責任と選択 - 少子化をめぐる議論と人口問題審議会報告書』ぎょうせい、1998
- ・関井友子・斧出節子・松田智子・山根真理「働く母親の性別役割分業観と育児援助ネットワーク」『家族社会学研究』3：72-84、1991
- ・野沢慎司「家族研究と社会的ネットワーク論」野々山久也・渡辺秀樹編『家族社会学入門 家族研究の理論と方法』文化書房博文社、162-191、1999
- ・牧野カツコ「育児における〈不安〉について」『家庭教育研究所紀要』2：41-51、1981
- ・ - 「乳幼児を持つ母親の生活と〈育児不安〉」『家庭教育研究所紀要』3：35-56、

1982

- ・ 牧野カツコ・中西雪夫「乳幼児をもつ母親の育児不安 - 父親の生活および意識との関連」『家庭教育研究所紀要』6：11-24、1985
- ・ 岡英子「有配偶女性のディストレスとその規定要因」石原邦雄編『妻たちの生活ストレスとサポート関係 - 家族・職業・ネットワーク』東京都立大学都市研究所：151-177、1999
- ・ 松田茂樹「ネットワークの中で育児をすること 育児のwell-beingへのネットワーク構造アプローチの試み」『LDI REPORT』ライフデザイン研究所、2000.4：31-53、2000
- ・ - 「父親の育児参加促進策の方向性 - 育児参加の規定要因分析の視点から」国立社会保障・人口問題研究所編『少子社会の子育て支援（仮題）』東京大学出版会、近刊
- ・ 松本康「都市度、居住地移動と社会的ネットワーク」『総合都市研究』東京都立大学都市研究所、52、1994
- ・ 丸尾直美「福祉ミックス社会とは何か」加藤寛・丸尾直美編『福祉ミックス社会への挑戦 - 少子・高齢時代を迎えて』中央経済社、1-25、1998
- ・ 山根真理「育児不安と家族の危機」清水新二編『シリーズ家族はいま...4家族問題 - 危機と存続』ミネルヴァ書房、21-40、2000
- ・ 安田雪『ネットワーク分析 - 何が行為を決定するか』新曜社、1997
- ・ 渡辺秀樹「変容する社会における家族の課題」渡辺秀樹編『変容する家族と子ども - 家族は子どもにとっての資源か』教育出版：174-191、1999
- ・ Acock, Alan C. and Hurlbert, Jeanne S. " Social networks, marital status, and well-being " Social Networks, 15 : 309-334.1993
- ・ Burt, Ronald S. " Network Items and the General Social Survey " Social Networks, 6 : 293-339.1984
- ・ Cohen, Sheldon and Wills, Thomas A. " Stress, Social Support, and Buffering Hypothesis " Psychological Bulletin, 98 (2) : 310-357. 1985
- ・ Fischer, Claude S. To Dwell Among Friends : Personal Networks in Town and City, The University of Chicago Press. 1982
- ・ Hall, Alan and Wellman, Barry " Social Networks and Social Support " Cohen, Sheldon and Sym, S. Leonard eds. Social Support and Health New York Academic Press, 23-41. 1985
- ・ Marsden, Peter V. " Core Discussion Network of Americans, " American Sociological Review 52 : 122-131. 1987
- ・ Mclanahan, Sara and Adams, Julia " Parenthood and Psychological well-being " Annual Review of Sociology, 13 : 237-257. 1987
- ・ Scott, John Social Network Analysis : A Handbook, New York : Sage Publications. 1991
- ・ Simmel, Georg, " The Web of Group Affiliations, " Kurt Wolff (eds) , Conflict and the Web of Group Affiliations, Free Press. 1922

- Wellman, Barry “ The Network Community : An Introduction, ” Wellman, Barry eds., Networks in the Global Village : Life in Contemporary Communities, Colorado : Westview Press, 1-47. 1999
- Wellman, Barry. and Gulia, Milena “ The Network Basis of Social Support : A Network Is More Than the Sum of Its Ties, ” Wellman, Barry eds., Networks in the Global Village : Life in Contemporary Communities, Colorado : Westview Press, 83-118. 1999